

西村純氏ロングインタビュー

第1回：高校時代まで



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院自然科学研究科 〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1〉

e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

協力：高橋美和

昨年連載した古在由秀氏に続いて西村純氏のインタビューを今月号より連載いたします。西村氏は1927年生まれで東北大学卒業後、理研の仁科研究室で助手となりました。そこで仁科芳雄、朝永振一郎、早川幸男らの薫陶を受け、宇宙線の理論的研究に携わります。特に宇宙線の3次元電子シャワー理論のNK関数（西村・鎌田関数）が世界的に評価され宇宙線シャワーの解析に広く使われています。また気球実験による宇宙線・X線観測、X線天文衛星、VSOP計画にもかかわっており、宇宙科学研究所長を務められました。今回は少年時代から旧制第二高校時代までのお話です。

西村純氏略歴

1927年 東京に生まれる
 1948年 東北大学理学部物理教室 卒業
 理化学研究所仁科研究室 助手
 1950年 神戸大学文理学部物理教室 助手
 1956年 東京大学原子核研究所 助教授
 1966年 東京大学宇宙航空研究所 教授
 1981年 宇宙科学研究所 教授
 1988年 宇宙科学研究所 所長
 1992年 神奈川大学 教授
 1997年 山形工科大学アカデミー 学校長



写真1 西村純氏近影。

●引っ越しばかりの少年時代

高橋：インタビューを引き受けていただきどうもありがとうございます。まずはお生まれの方からお願いしていいでしょうか？

西村：はい、僕は昭和2年1月2日に生まれました。うちの親父は銀行員なので始終転勤で動くのですが、生まれたときは東京の大井町にいました。その後佐賀県の唐津、福岡県の直方に行っ

た。巢鴨の刺抜き地藏の近くなんです。それで2学期が終わって3学期のときに、だから12月ですよね、巢鴨はあんまり雰囲気が良くないから、中央線沿線の阿佐ヶ谷の方に移ることになった。阿佐ヶ谷には中流階級が住んでいるんだな。巢鴨の方はいわゆる商売人が住んでいるところなんだ。

高橋：お子さんの教育のために引っ越すという感じですか。

西村：子どもの環境が良くないと思ったのかもしれないね。移る前に先生に挨拶に行った。僕の記憶が違わなければ皇太子殿下、今の天皇が12月23日に生まれて、確かその日だったと思うよ。女か男かでドラの鐘がいくつ鳴るかというので、皇太子がお生まれになったというので大騒ぎした。

挨拶に行ったら先生が「この子は全然ダメかと思ったら、近頃は少し良くなってきた。何かものになるのかもしれない」と言ったというので、お袋がえらい喜んでね。その頃、お袋は「主婦の友」か何かを読んでいて、「3人子どもがいると1人は馬鹿が出ると書いてあるけども、本当だと思う。この子は年取ったら使い物にならんから、どうやったら食っていけるか。」と言っていた。どうやら唱歌の成績はいいから、流行歌手にでもなったらどうかか言っていたんだよね（笑）。

ともかく杉並第五小学校に移りました。杉並第五は非常に環境が良くてね。僕の家が大家さんが守井さんといって、家のすぐ近くにいて、その子と2人がキどもで遊んでいたのだけどもね。杉並第五というのはそのときは知らなかったけれども校長がものすごく力を入れていて東京の中でも有数の進学校だったんだよね。こっちは最初は真ん中へんぐらいのところになんとなくしがみついている、守井君のほうが僕よりちょっと上なんだな。でもお袋が「あの守井みたいなのと遊んでいたのじゃろくなものにならないから注意しろ」と言っていたな（笑）。杉並にいたときにはたいへんハッピーで、今でも毎年同級会をやる。驚くべきことに一組に40人とか50人しかいなかったと思うのだけども、そのうち東大に3人か4人行っているのだよね。その守井君も東大に行ったんだ。

高橋：杉並第五小学校はレベルが高かったんですね。いっぱい勉強させたんですか？

西村：そうね。宿題より、毎週月曜日の1時限に

算数の試験をするんだ。優しい問題から難しい問題、スピードも必要なんだな。順位を毎回発表してね。それを毎週やる。それでしばらくして小学校3年のときに今度は酒田に引っ越す。

高橋：今度は酒田ですか。山形ですね。

西村：都会から来たというのでみんなチャホヤしてくれて。3年の2学期から入ったのだけど、酒田は半年ぐらい勉強が遅れているわけ。東京で真ん中あたりというのは酒田でトップクラス。だからものすごい楽なんだ。

そのうちに古本屋でぼんやり本を見ていたら「子供の科学」という雑誌があって、読んでみたら面白いじゃない。そこに、模型モーターの作り方、模型飛行機の作り方が書いてあるわけ。小学校4年になった頃かな。親父にあの雑誌買ってくれて言ったら、「4年生で1番になったら買ってやる」って。悪い親だね（笑）。喜んで買って与えるべきだと思うんだけど。そのうちたまたま1番になったら、親父がその本を買ってくれるようになった。面白くてしょうがない。まず、電気モーターってものを作ってみるかっていうので、鉄の雨樋の支えがあるでしょ。これを切って、穴が一つ開いているのでそれに棒を挿して、コイルを巻いて、コミューターはペン軸のペンを使えと書いてある。

高橋：身の回りのものでできるんですね。

西村：そうそう。身の回りのものだけでできる。解説の文章を完全に誦んじるほど覚えて。小遣い銭をせびって買ってきてはやる。でも切れないわけだよ、鉄がね。でね、やすりで一生懸命削って一応できたんだけど、完全にいい格好していれば摩擦がないんだけど、そんなに上手くいかないわけだよ。それで僕ん家の前に電気屋がいてね、「これ、回らないけどどうしてだろう」って言ったら「これはダメだよ」って作り直してくれたんだ。そしたら回りだしたんだよ。単一の電池でね。これはおもしろいってんで家にもってってさ。家にある電池をかたっぱしからやって、そし

たら親父に怒られて、「何がそんなに面白いんだ」って言ってディスカレッジするんだな。ひどい親だ(笑)。こんなくだらんことやらんで勉強しろと。

高橋:「子供の科学」も勉強ですよな。

西村:理科の勉強。あと僕の姉が2年ぐらい上だからさ、化学とか教科書が部屋にあるから見てるとけっこう面白いんだな。だから2年先を勉強するようになった。それに「子供の科学」を読んでいたから学校の理科なんて先生より俺のほうがよく知っているんだな。たまに先生が間違うと、先生違いますよなんて言うものだから嫌がられた。

高橋:では子どもの頃は理科に興味があったと。

西村:そうですね。特に化学に興味があったね。大元は杉並第5小学校の算数ですよ。だけど、モーターを作ろうと思うと、どうも万力だとかドリルだとかいろいろ道具立てがそろわないとだめなんだね。ところが模型飛行機のほうは道具立てがなくてもできるわけだ。で、模型飛行機作ろうというのでやり始めて。竹ひごから自分で作ると。でも1発目は何しろモノがでかすぎてね、ちょっと完成までに至らなかった。そのうち親父に頼んでキットを買ってもらったんですね。ある程度そろったやつ。それでわけなくできるようになったんだ。そこで、日和山公園という公園にもって行って飛ばしたんだ。そしたらさ、いい按配に飛びやがってさ、30秒ぐらい。あれでもう途端に参っちゃったね。

高橋:それで飛行機が好きになったと。お父様が銀行にお勤めになっていたというお話でしたが、昭和の初期は恐慌が立て続けにあっただいぶ景気が悪かったというイメージがあるのですが。

西村:確かに一番の不況だったのは僕が生まれてから1年くらい後なんだね。だけどその前からもちろん悪かった。田舎では娘さんを売ったりね。結局満州事変でだいぶ良くなってきたんですよ。それでもまだ悪かったけれども、まあ子どもだからその辺のことはわからないわけね。ただね、子

どもでも日支事変の始まる前の年、昭和11年あたりか、何となくね、景気が良くなってきた感じしたね。昭和11年てのは二・二六が起きた年だね。

高橋:では子どもの頃はあまり不自由しなかったと。

西村:全然。年取ってからのほうがずっと不自由。昔は家が広くてね。普通の家に電話がないときにうちにはついてた。親父は支店長だから何かあったときのために、タクシーにも乗っていたものね。町に一つか二つしかないタクシー。名士だよな。

高橋:二・二六はかなり大事件だと思うんですが、何か記憶はございますか？

西村:ちょうど酒田に移った直後で、何か親父がね、えらいことになったって言って帰ってきたような記憶があるね。早川(幸男)さんなんかはね、ちょうど武蔵高校の入学試験で四国の田舎から出てきて、なんだかみんな鉄剣付き鉄砲で怖い顔して立ってると。「いやあ、東京ってのはすごいもんだな」って感心して帰ったらとんでもない話になってたって(笑)。

●中学時代

西村:それから中学かな。酒田中学というのがあって、そこに行くわけだけど、そのころ守井君から手紙が来てね。杉並第五小学校が入試に向けて特別訓練をやると。「私の模擬試験の成績では間違いなく府立四中に入れると言われました」なんて来てね、ええってなもんですよ。四中は当時べらぼうにできると言われてたんだな。あれが入れるわけないと思ったりして。それでだいぶ後になってわかったんですが、この守井君が三菱電機の副社長になって、ええって驚いたね。

高橋:それはすごいですね。

西村:あいつがそんな偉くなるわけない。僕が宇宙研の所長のころだったんだけどね、三菱電機から仕事の関係でよく人が来ていたのでそのとき

「おたくの守井さんによろしく伝えておいて」ってね。そしたらさ、向こうもね、あんなガキが所長になるはずがないって。

高橋：お互いにびっくりしたわけですね。

西村：そうそうそう。庶務に問い合わせがきてさ、ほんとかっていうわけだ。どうも本当らしいということで、一緒に酒飲んで。今でも年に1回会ってるけどね。

それで話を戻すと、こっちはこっちで酒田みたいな田舎でもちゃんと補習授業やってくれましたよ。組で60人いたな。

高橋：中学入試は競争が激しいんですか？

西村：まあね。田舎にしてはね。ともかく中学に入ったわけだ。そのころは模型飛行機熱たるやますます燃え上ってね。「子供の科学」に夢中になって。それ見てね、模型飛行機のところは全部勉強して。それで、休みでないときに飛行機を作るわけにいかないから、いろいろ模型飛行機の勉強したり、設計図書いたりして、休みになるのを待っているわけだ。

高橋：飛行機に夢中だった。「子供の科学」にはほかにどういう記事があったんですか？

西村：電気とか、物理の話とか。玉木英彦さんなんか原子や放射線のことを書いていたんじゃないかな？ 仁科研が1931年にできてたのだから。

高橋：難易度は中学生向けぐらいですか？

西村：うんそう。中学だね。あれを読んで科学者になった人はずいぶん多いね。昔の人はほとんど読んでいるね、あれを。

高橋：先生は小学校のころから読んでいたんですよ。少し難しかったのではないですか？

西村：いやそんな難しくなかったね。丁寧に書いてあるんだ。どっちかっていうと読むものは少ないしね。ものを作るときは、もう何回も何回も読んでいるから、もうほとんど記事をそらんじていて。今でもあのぐらい丁寧にやったら、実験なんて絶対に失敗しないな(笑)。

それでね、「子供の科学」が毎年模型飛行機の

展示会をやるんですよ。2年になってそれに出してやろうと企みましてね。結果的に言うと、次の年から太平洋戦争が始まったんでそれが最後になったんだけどね。

高橋：それは優秀なものが展示されるんですか？

西村：いや、全部展示する。で、いいのにはメダルをくれる。それでね、ドイツのユンカースJu87っていう急降下爆撃機を出そうと思った。1年ぐらいかかって計画を立てて夏休みに作ったんだ。まずプロペラから作ったわけだ。それで右回りのプロペラを作るのに間違っって最初に左側に切っちゃったんだな。もうしょうがないから左に切ろうと思って。まあなんとか間に合わせて東京に送ったわけだ。そして「子供の科学」を見たら、「全国から続々集まる模型飛行機」という写真があって、僕のがしょっぱなに載っていたんだ。プロペラのひねりが普通と逆だから間違いない。だけどできは悪いからね、賞には入らなかったけれど、参加賞というのをくれましてね。

その頃「航空朝日」というのが出たんじゃなかと思うんだけど。これを買ってきて全部製本して、もう物理屋だったらPhysical Review誌を製本して自分でもっているみたいなもんだよ。大したもんだよね。あと「模型飛行機の理論と実際」という本ね。木村秀政先生という航空の大家で、戦争中の戦闘機的设计なんかやった人ですよ。YS11っていうのはこの人が設計したんです。僕はこれを一生懸命読んで勉強したんだ。まあ中学生だからたかが知れてんだけど。で、木村先生に会ったときにちょっとそんな話したらね、先生が日経の「私の履歴書」っていうのに書いてくれたんだね。「私が書いた『模型飛行機の理論と実際』という本を読んで、その方面に進まれた西村君という立派な方がおられる」って。

高橋：そういう勉強というのは、後々役に立ちましたか？ 気球のときとか。

西村：うーん、どうですかね。趣味でやってる程度だからね。あんまりアカデミックな話じゃない

ですよ。まあ常識はついたかもしれないね。

●戦争と軍事教練

高橋：日中戦争が始まったのは中学のときですか？

西村：うん、そうそう。それで陸軍の大佐とか少将ぐらいの偉い人が中学校にきて演説ぶつわけ。日本の陸軍がいかにか優秀か、戦争やったら絶対負けないと。だから君たちは軍人になれと。軍としてはいろいろ中学を回って優秀な学生を集めようという魂胆だったと思うよ。幼年学校は中学2年から受けるんじゃないかな。

高橋：幼年学校というのは？

西村：幼年学校は幹部養成ですよ。幼年学校を出たら陸軍士官学校へ行って、その中で優秀なのは陸軍大学校へ行くんです。だから日本人で優秀なのは帝国大学と海軍と陸軍、この三つに行ったんですよ。

高橋：先生はそういう気はなかったんですか？

西村：いや僕はあまりなかったね。命が惜しいとか、臆病なんだな。あんまり体操なんていうのは得意じゃなかったしね。だけど憧れた人はもちろん僕らの友達でも行ったのがいるよ。

高橋：中学での軍事教練はどうでしたか？

西村：僕は割合成績はよかったんですね。

高橋：どういったことをやるんですか？

西村：まず、「捧げ、筒！」の練習ね。そして歩き方と敬礼ね。あと号令のかけ方。声が小さいとかい声を出す練習をさせられる。だから僕も声が大きくなったんだね。近頃なんかみんな声が小さくてね。学会なんかで、何言ってるんだかわからないのがあるけどね。ああいうのは訓練すれば、大きい声になりますよ。それから三八式小銃歩兵銃を撃つ練習ね。

高橋：本物を撃つんですか？

西村：本物はね、2年にいっぺんしか撃たせてくれなかったね。本物撃ったときは、80点ぐらいかな、非常にいい点だったね。300メートル先に

的があって何発当たったか。

高橋：指導する人は軍から来るんですか？

西村：それはもう中国戦線あたりでの百選練磨だね。だいたい中学だとたたき上げのが来るね。陸軍士官学校出たようなのは来ない。だからもう根っからの職人みたい。

高橋：怖いんですか？

西村：うん、怖いね。そして厳しい。夜戦のやり方とか、そういうのは実によく教えてくれましたよ。夜寝るときに塹壕に入っていると夜襲があるかもしれない。夜真っ暗だったら敵がどこから来るかわからない。向こうに岩があったら夜寝る前に岩のわきに向けて銃を固定しとけど。夜襲だとなったら、敵が岩陰からはい出してくるからバンとやれと。てなことを教えてくれたね。

高橋：なかなか実戦的ですね。では将来自分も戦争に行くかもっていうのはありましたか？

西村：いや可能性は十分にありましたよ。大学でもその可能性は残っていました。それはまあしょうがないと。それで中学3年の2学期ぐらいになった頃、太平洋戦争が12月に始まるんだよね。そのときはもう日本中が沸き立ってたね。

高橋：そうなんですか。

西村：やあ、今ね、軍が勝手に暴走したみたいなことみんなが言ってるけど、いやそういう面もあったかもしれないけど、日本の国民の平均値っていうのは、もっと右寄りだね。なんでまだやらないんだっていうね。

高橋：開戦前からですか？

西村：そう、もうやれやれっていうね。だからあれ止めるのたいへんだったと思うよ。要するに日中戦争が長引いてね、5年間ぐうたらやってた。もうみんなやりきれなくなったんだね。それからドイツが快進撃してるでしょ？ 何で日本だけやらないんだっていう。で、日本の陸軍も海軍も桁違いに強いてわれわれは教育されているからさ。やれば必ず勝つって教育されてるからね。何でやらないんだっていうわけだよ。そこで、太平

洋戦争が始まって、やった一というわけだな。

高橋：それで国民も盛り上がったわけですか？

西村：もう実に気分は晴れ晴れ。それでね、初戦の大戦果でみんな驚いていたけど、僕なんか全然驚かなかったね。教育受けてるからね。日露戦争の前は砲弾は3発目に相手に命中すると。要するに敵の軍艦の向こう側に1発、手前に1発、3発目で命中、とこういう訓練をしてたわけ。ところが今やもう初めから百発百中でいきなり当たるようにやってるんだという講釈受けてるからね。当然だと思っているわけ。

高橋：勝って当然だということですね。

西村：うん。そのうち銀行の本店から親父の方に、東京に来てもらわなきゃという話が内々にあったわけ。でも東京に行くとは戦争が始まっているから、子どもたちが住むには良くないと。親は静岡の出身だから、お前ら静岡に行っとけど。で、僕は静岡中学に編入するんです。それで一番参ったのが、化学と数学ね。

高橋：あれ、そうなんですか？ お得意の科目ではなかったんですか？

西村：一番得意なのがダメなんだ。漢文は悠々で。一番不得意な英語なんてのも悠々なんだな。なぜかというと化学は有機化学をやっていたんだな、あそこは、中学によってスピード違いますから。教科書も違いますね。有機化学が始まっていたんだね、もうすでに。

高橋：静岡中学のほうが速かったわけですね。

西村：そりゃまあエリート校だから。数学は無限級数やっていたね。こっちはその前の部分をやっていないから大分苦労したね。

それで、静岡に行ったちょうどそのころ、光弾性の研究で有名な辻二郎さんという方が中心になって、理研の紹介映画を作った。光弾性というのはプラスチックみたいなので、ひずみで偏光が変わるんですよ。それ取るとどういふふうにかが内部にかかっているかわかる。それで「科学の殿堂」という映画を作って、できてすぐ静岡に講

演に来たんだね。もうものすごく感激しましたね。それはもうたいへんなもんですよ。理研の最盛期。もう仁科研もあったしね、サイクロトロンもできてた。

高橋：理研の研究を紹介する映画ですか？

西村：そうです。いかに素晴らしいかと。で、宇宙線研究の僕の先輩なんかも出てね、中間子の論争やってるのが出てきますよ。関戸(弥太郎)さんとか武谷(三男)さんとか。皆川(理)先生も出てくる。

高橋：後々一緒に研究をする人たちですね。

西村：大先輩。これは素晴らしい映画ですね。そのうち親父が東京でなく米沢に行くということになって、米沢に行きました。米沢には上杉藩由来の名門校で米沢興讓館というやつがあって、その校長と市長と銀行の支店長なんてのは街のボスだから、時々会っちゃあ飯を食っているでしょ。そしたら校長が「人間静岡なんて生暖かいところにいたんじゃ、ダメになる。米沢に連れてきたら、俺が叩き上げてやる」と言って。ちょうどミッドウエー海戦の頃じゃないかな、後から考えると。米沢興讓館中学は上杉鷹山の作った200年ぐらいの歴史があるたいへん立派な中学ですよ。

高橋：名門なんですね。

西村：そりゃあもう。

●高校受験

西村：そのうち冬になるわけだけれども、高等学校の試験は中学4年に受けられる。あるとき近くの銭湯行ったら英語の先生が現れて、「君、どこ受けるんだ」と言うから、「二高でも受けてみようかと思っています」と言ったら「近頃の若い者は気ばかり強くて困ったものだよ」と言うんだな。腹立ってね。「別に英語だけで通るわけじゃないではないですか」と言おうと思ったけど、余計なお世話だと思って黙ってたけどね。

うちの近くの高校は山形高校か二高かどっちかなんですよ。で、よっぽど自信があれば東京に出

で一高に入りゃいいんだけどそれほど自信もないし。まあ折角だから二高でも受けてみますかって、それで受けることにして。米沢興譲館中学だよね、4年生で受かるのは2年に1回ぐらいかな。五卒、浪人を入れると年に2人ぐらいは入っているんだ。

高橋：いわゆる四修五卒ですね。

西村：うん。正規でいえば5年生で卒業なんだけど4年生でも学力があれば、てな感じだな。

高橋：飛び級みたいなものですか。

西村：ま、そんな感じね。四修ってのは割合いるんじゃないかな、2割くらいかもしれない。五卒が全体の5割ぐらいで、あと3~4割は浪人。

高橋：浪人も結構いたんですね。

西村：浪人もいた。結構難しいんだよ、とか言ってる(笑)。そりゃ当然そうだよな。

高橋：じゃあ四修で入ると、周りは年上の人ばかりという感じになりますか？

西村：そうなんだよ。でもね、四修がいいかどうかというのは非常に問題で、要するに精神的に未熟なわけなんだよね。だからね、やっぱり五卒ぐらいで入ったほうがノーマルだね。そのほうがいいと思うよ、僕の経験では。やっぱりそのへんの1年はでかいですから。

高橋：高校入試はやはり難しいわけですか。

西村：そりゃそう。だって昔の旧制高校のポストっていうのは大学のポストより少ないんですよ。旧制高校に入っていたら必ず帝国大学に入れる。ただ東京大学の物理教室と指定するとちょっと数がオーバーフローするから、物理ならどこでもいいって言えば名古屋大学、九州大学、必ずどっかあるんですよ。ま、考えてみればレベルはそんなに変わらないんだよね、先生たちの。

それでいよいよ勉強しなきゃいかんというわけだ。数学や物理なんていうのはまあいいとして、英語は四修と五卒でやっぱりかなり差があるね、1年違うから。模型飛行機なんかにかかわっているわけにはいかないんだ。で、2、3カ月勉強した

んだ。今でもあると思うけど、蛭雪時代って受験雑誌を読むとね、入った人の体験記が書いてあるんだ。もう1年前から計画立てて、丸1年徹夜してやっと入ったみたいなことが書いてあった。これじゃ俺はとでも入れねえなと思って。でも二高に入って聞いたら、そんなに勉強した人は一人もいなかった。まあともかく、英語っていうのはにわか勉強では間に合わないから。ところがその頃ちょうどアメリカと戦争が始まってね。英語をやるべきかどうかかなり議論があって、結局大晦日の晩に文部省がくじ引きやって英語か古文に決めると。はじめから決めとくと勉強しなくなっちゃうから。で、大晦日の晩にラジオで放送して結局古文になった。いやあそれ聞いたとき、僕飛び上がって喜んだ。古文っていうのはまあ日本語だしね、にわか勉強がききますから。

高橋：英語は敵性語だからということですか？

西村：まあそういうことなんでしょうね。陸軍関係がね。海軍はそんなこと言わなかったね。やっぱり外国まわっているしね。戦争に勝つにしろ負けるにしろ、英語でもできなきゃ話にならんと。

高橋：ではその年は英語がなくなって。

西村：それはもう日本の中で空前絶後ですよ。1回だけだもん。まあ僕の前後はみんなできないけど、その年のやつは特に英語ができないという。それで一次試験受けて。

高橋：一次試験は筆記ですか？

西村：そう。倍率はだいたい3倍ぐらいじゃない？で、自分は落ちるのと入るのとの境目ぐらいじゃないかと思ったんだよね。

高橋：どんな科目がありましたか？

西村：化学、物理、数学じゃないかな。あと歴史と作文があったね。まあなんとか終えて米沢帰って。発表のときは落ち着いていられなかった。仙台から電話があって受かったってんで、「シメた」って。すると今度は二次試験があるわけ。

高橋：二次試験は何をやるんですか？

西村：二次試験は面接。一応新しい服を着て出て

いったんだよ。まずね、数学の問題を見せて、これ解いてみろと。

高橋：その場で解くわけですね。

西村：うん、それは何となく解けたんだな。そして「君は今日新しい服を着てるけど、どうしてそんなもの着てるんですか」って言うから「両親が新しいものを着てけって言うから」って答えた。そして「理由はほかにないのか」って言うんだ。「ないです」なんて言ったら、「君は両親に言われれば理由なしでなんでもやるのか」「まあそういうわけでもないんですけど」「それじゃあ理屈が通らねえんじゃないか」って。それで終わり。

高橋：厳しいですね。

西村：先生たちもくたびれてからかっているんだな。

高橋：それで無事に合格したわけですね。

●二高入学

西村：それでね、問題は全寮制だ。僕はね、科学寮というのに入りたくてしようがなかったんだ。先輩にも頼んでおいたんだけどさ、そして明善寮ってところに放り込まれたんだ。

高橋：寮によって何か違うんですか？

西村：それは普段やるのが違うわけだ。寮の中で、科学寮だったら、まあ朝から晩まで実験やってみるとかさ。

高橋：科学寮というのは科学をやる寮ということなんですか？

西村：そう。

高橋：授業とは別にということですか？

西村：全然、別。ま、そのほかのこともやるでしょうけどね。僕はそこに行きたかったんだけど入れてもらえなかったんだな。それで事もあろうに明善寮ってところに放り込まれたわけだ。二高はもともとガラが悪いんだけど、明善寮ってのは最もガラが悪いって言われているところで。しかも戦争中なんでね、それまではラグビーだとか野球

とかテニスとかピンポンとか、そういう部に分かれてたんだけど、それが全部なくなって国防部と名前を変えたわけです。いやだなと思ったんだけど、だからって二高に入るのをやめるのもアホだし、まあ行くことにしましたけど。明善寮というのはそういう状態だから何でもやるわけだ。朝から晩まで。要するに運動をやるんじゃないんだね、くたばることが重要（笑）。

高橋：だいぶしごかれるわけですか。

西村：まあ殴ったりはしないけどね。大体僕も2年になるときにわかったんだけどね、1年が来るぞっていうんで、その前に1週間ぐらい合宿して鍛えるわけだ。そうするとね、受験勉強を一生懸命やってナツパみたいになってフニャけている1年生が入ってきてすぐ走ったって、2年生に絶対かなわない。仙台1周りしたらさ、2年生はなんともないのに1年生はみんなひっくり返っちゃうんですよ。

高橋：それで先輩のすごさを見せつけると。

西村：それでまずね、入学式がありましてね。まず荷物がつくから寮に行って。すると先輩がえらい親切なんだ。荷物なんかもってくれてね。「君の部屋はここだよ」なんて。えれえ親切だな、なんて思っているわけだ。で、入学式があるからというので校庭に行ったんですよ。

二高の校長は阿刀田令造校長といって八方破れみたいな人。ああいう学生を相手にやる校長というのは一風変わってないとダメなんだな。まず入学式で集まってさ、ひと通りの訓示があってね。要するに青年がイジイジしちゃあいけないと。だからタバコ吸うにしても、酒を飲むにしても、未成年者だからって人に隠れて吸うようなことしちゃいかんと。堂々とやれと（笑）。ひでえんだよ（笑）。その次にね、そのころ福岡高校で30人くらいドイツ語ができなくて落第したという新聞記事があって、戦時中になんたることだってね。それで、「わが二高におきましてはドイツ語ができなかったって落第なんかさせない。みんな

好きなことをやってくれ。でもただ遊んでたんじゃだめ。好きなことを誠心誠意やってくれ。結果、成績が悪くても決して落とすようなことはない。安心してくれ。」と、こう言うんだな。

高橋：豪快な校長ですね。

西村：二高の先輩が先生になっていますから、あんまり厳しいこと言う校長は追い出されちゃったことがある。そういう面白いとこ。要するに二高の学生の一部は、親父が二高を出た連中です。すでに心得ているわけだよ。うちの親父みたいに夜間中学を苦勞して出てきた人間には話がわからないわけだ。せっかく学校に入れたら勉強しないで遊んでるってんで、これはどんでもないところに入れたらと思ったらしいけど。

●寮での洗礼

西村：それで入学式が終わって、いよいよ寮に入るわけだけど、寮に帰って晩飯食うまではいいんだけど、「今晚これから入寮式をやりますから、みんな大講堂に集まれ」って言われて。100人ぐらい集まったのかな。まず先輩が自己紹介するわけだけど、比較的まともにユーモラスにいろいろやるんだ。で、今度は新入りが始めるわけね。新入りがその真似をしたとたん怒鳴りとばされてさ、「お前ら何だと思っているんだ！」って。それで何を言ってもギャアギャア怒鳴られてさ、みんな立ち往生だよ。

高橋：先輩もみんな来ているんですか？

西村：来ている。ところが先輩は代わり番こに部屋に帰って寝てんだよな。こっちは何も知らないで座っているわけね。24時間寝ない。飯は握り飯が配られる。もう、クッタクタですよ。

高橋：1学年で何人ぐらいいたんですか。

西村：一つの寮で30人くらいでしょ。明善寮にはそれが六つあったから180人だね。

高橋：寮の中に1年、2年、3年と30人ずついるわけですか。

西村：いや、2年になると半分ぐらいに減っ



写真2 明善寮入寮式。プログラムには「旧寮生自己紹介並びに余興」などの項目が見える。

ちゃっている。2年になると寮にいるオブリゲーションないんですよ。仙台に住んでいる人は自分の家に行くし、寮が嫌いでしょうがないという人もいるでしょう。3年になると神様みたいなものでね、古参兵だな。ふんぞり返っている。

高橋：3年生も多少は寮にいるんですか。

西村：多少いる。3年生は大学の試験があるから大事にされてね。それはもう威張り腐っていますよ。神様みたいなもので、あんまり変なことも言わないですし、いじめたりもしないよ。1年生を可愛がって。

高橋：2年生が1年生を指導するんですね。

西村：そう。それでまあともかく24時間やられてさ。僕みたいに米沢みたいな田舎から出てきたのは、あまりいびられないんだけど、東京の府立一中とかそういう名門校なんかから来たなんていうと、みんな袋叩きでね。そういうプライドは完全に潰しちゃうわけですよ。それで部屋に帰ってやれやれって寝るんだな。

高橋：部屋は1年生同士で？

西村：2年生もいた。1部屋5人だったと思う。

高橋：それじゃあ気を抜けないですね。

西村：3人が新生で2人先輩とか。で、やれやれって寝てたら、そうね、12時過ぎぐらいだろうね。突然大地震が起きたみたいにガタガタタって来て「起きろー」とか言って。何だろうと

思ったら、よその寮の先輩がやってきてさ、「てめえ、ここをどこだと思っているんだ！」って。なんかいきなり日本刀を抜いてぶん回すじゃない。「ここに来たからには今までのを全部かなぐり捨てて素っぱだかになって出直さないとダメだぞ！」って説教くらって。は～って。ま、ともかく終わったと思って寝てたら、また2時間ぐらひして大地震みたいなのが起こってさ。自分の寮の先輩が来てね、今度は歓迎だな。ダンスみたいなもんで一緒に跳ねろっていうわけだ。寮歌か何か歌わされてさ、もうくったくたですよ。やっど次の日に学校が始まってさ、学校の授業ってこんな楽なもんかと思ったよもう(笑)。ホントに天国みたいなもんだ、学校行っている間は。

高橋：寮でしごかれるより授業のほうがよっぽど楽だということですね。

西村：それで学校から帰ってくると、集合とかいうんで出ていくとき、これから仙台一周だとか言って。で、くったくたになってたら今度はラグビーやらされてさ。

高橋：そういうのは全員やるわけですか。

西村：全員。中には少しおかしくなっちゃうのもいるんですけどね。ともかく世間と隔絶した禅坊主みたいな生活をして。だから学校の勉強なんかやっている暇はないんだね。2年生は学校の勉強なんか全然やらないで妙に難しい本ばかり読んで、カントだのヘーゲルだの。あんなの本当はわかってないと思うんだけど、わかったようなこと言って、みんな恐れをなしてね。何となく読んでみようかなという気になったね。なんか世の中で一番偉くなったような気になってんだよね。

●二高の生活

西村：2学期になると少しリラックスする。たまには街に出る。1週間に一遍ぐらひ。シャバってのはいいものだなんて思って。だから、戦争がどうなっているかなんて全然わからないんですよ。

高橋：学校にいたら情報があまり入ってこないわ

けですね。

西村：ガダルカナル撤退なんて知らなかった。

高橋：新聞とかは学校にくるんですか。

西村：いや、新聞なんて全然こない。でもまあ、2学期のころは映画館にも行きますからある程度はニュースもわかる。それでね、寮祭ってのがあってね、秋だったかな。何やるかってんで、出し物を考えるんだけど、やっぱりね、あれだけいると才能のあるのがいるんだね。文科もいるし、で、何かやることになって。

高橋：寮は理系も文系も関係なしで？

西村：関係ない。文章のうまいのもいるしね。偉いもんだなと感心しますよ。で、寮祭のときね、「山霧」っていう劇をやることになった。山で何か霧が流れてきてロマンチックな雰囲気になるんだけど、霧出さなきゃいけない。で、「西村お前得意だろう」ってんでね、僕はね、化学の研究室、図書館に行って調べて。塩化スズってのを温めると塩素が出てきてね、それが周りの水蒸気とくっついてHClになる。それでやったんだ。

高橋：それって有毒じゃないですか？

西村：有毒なんだよ。目がチカチカしてかなわんていうから、周りにアンモニアを入れてさ。それでうまくいってね。批評にいろいろ書いてあったけどその中にね、霧の効果も素晴らしかったと。得意になってね。

高橋：薬品は自由に使えたんですか？

西村：二高の実験室があって、そこに可愛い女の子がいるから、チョッちょと言って。それぐらひのことはやらせてくれますよ。

高橋：寮祭は寮の中だけなんですか。

西村：いや、寮祭は年に1回だけども、そんなときはパブリックにするんですよ。するとみんな物珍しくのぞきにくるわけだ。基本的に仙台にはね、あまり誇るべきものがなくてね。第二師団と二高と日銀だけなんですよ。全国的に重要な意味をもつのが。だから二高の学生を非常に大事にしましたね。まあ、東北大学もありますけど、東北

大学より二高のほうを大事にしていた。

高橋：二高は男子校なんですか？

西村：男子校。寮祭のときだけ女子がのぞきにくるわけだな。あそこにある女子高では宮城女専てのがある。二高の人で宮城女専の卒業生と結婚している人はずいぶんいるよね。宮城女専は東京でいえばお茶大みたいなもんじゃないかな。

高橋：寮祭で交流したりするんですか？

西村：いやね、交流なんてないですよ。恋愛関係だとかそういう類のものはね。要するに禅寺みたいなもんだよな。

高橋：二高の同級生にはどんな方がいらっしやいますか？

西村：西澤潤一（元 東北大学総長）っていうのがいてね、僕と同じ組だったんですよ。それが西村・西澤とくるものだから僕の後ろに西澤が座っていた。彼の話によると、僕が短足胴長だから、講義してるときにいい影になってよく後ろで寝てたんだって（笑）。まあ非常にかわいい坊やだったんだよなあ。あんなにすごい人間になるとは思わなかったね。

それから川口菊夫君というのがいましてね。それがね、僕が宇宙研にいるときに、なんか川口の息子が宇宙やってるらしいよって言うからさ、どこにいるんだって聞いたら、何でも東大の研究所だそうで。川口淳一郎君っていうらしいからってんで、つかまえて。

高橋：「はやぶさ」の川口さんですか？

西村：ええ。それで「君の親父さんは川口菊夫さんですか？」って聞いたら、「そうです」って言うから、「おれの同級生じゃねえか」って言うと、「ええっ」とか言って。それで親父に電話したらえらい喜んでましたね。いやあ、川口淳一郎君っていうのはものすごく優秀な人ですよ。

高橋：高校の授業はどれくらいあったんですか？

西村：授業は朝の9時から夕方の3時か4時くらいまである。

高橋：それは選択制ですか？ それともカリキュ

ラムは決まっているんですか？

西村：全部決まってる。ただ、初めから理Iと理IIと理IIIに分かれてたから。理Iってのは第二外国語がドイツ語で理学部、理IIというのはね工学部、理IIIが医学部。その頃は今と違って一番評判が悪いっていうので競争が少ないのが理IIIなんですよ。

高橋：西村先生は理Iですか？

西村：理I。だからあんまりドンケツじゃなかったんだね。ドンケツだったら理IIIにまわされちゃう。今考えると割合偉い先生がいたんですよ。彦坂忠義先生って言って、原子核のシェルモデルっていうのかな、実はそれを世界で最初に言い出してただけでも認められてなかったんですよ。もう一つ高速中性子論という原子炉の理論を世界に先駆けてやって。それから広根・彦坂の理論っていうのがあってね。東北大学に本多光太郎っていう偉いマグネットの先生がいたんだけど、広根徳太郎先生っていう方と2人でたいへん立派な理論を作られたんですよ。

それから数学は淡中忠郎先生っていう人に習ったんですよ。それは東北大の数学の先生ですよ。その先生も偉い先生でね、東北大の数学っていうのはレベルが高くて、淡中-クラインの双対定理とかいうのがあるんですよ。

高橋：高校の先生も研究するんですか？

西村：あっそれはね、昔の旧制高校っていうのはね、ポジションでいうと今の大学の教養学部に対応する。それから大学と両方にまたがっている先生がかなりいましてね。それでね、戦後みんな東北大の方に移ったんですよ。ただね、理学博士持ってないと教授にはなれないとか、そういうのはあったかもしれない。ああ、それから添田大佐ってのがいた、配属将校の。

高橋：高校でも軍事教練があるんですね。教練は、週1回くらいですか？

西村：毎週ある。米沢中学の教練なんかね、さすがにびりびりやるんだけど、高等学校くらいに

なると先生のほうもやっぱり相手を見てうまくやっていますね。変なこと言ったらなめられちゃうからね。面白いことにね、あるとき誰かが裸足で教練に出てきたら、「裸足じゃだめだ」って大尉が怒ったんだよ。それで「靴がありません」って言ったら「何か履いて来い」と。それで縄を足に巻きつけて「これでいかがですか？」って言ったら呆れ果ててたね。まあちょっとユーモラスなところもあったね。

高橋：じゃあそんなに恐れていたというわけではないんですか？

西村：高等学校になるとそうだね。塩釜行軍ってのがあって、往復30キロで鉄砲を担いでいた気がするな。いやあ、あれは死ぬ思いだったな。ただ僕はね、非常に運よく小隊長か中隊長になった。塩釜に着いたら先輩がたくさんいるからその家になだれ込んでね、銃を投げ出して飯ばかばか食ってさ。息吹き返してやっと帰ってきたね。

高橋：そういうのをやっていたら、だいぶ体力がつくのではないですか？

西村：いやあ、それはつきますよ。仙台一周なんてもうね、全然目じゃないでしょう。体だけは鍛えられますよ。

高橋：その頃は、食料がだんだんたいへんになってくる時期ですか？

西村：いやもう、たいへんだった。ただね、二高には第二師団が米を回してくれたんだね。それから仙台はね、やっぱり東京と違って僕がいるときの昭和18年はまだ大丈夫だった。で、町に行ってもレストランが開いていた。でね、9月に学年短縮で東京から東北大に入ったのが来たんだ。途端に町から食い物がなくなったね。その連中ががつがつ食ったから(笑)。それでも二高には第二師団が米を回してくれたからね。それくらい信用があったんだよ。

高橋：食事は寮で食べるんですか？

西村：うん、寮で朝昼晩。それで2年の夏休みになって、もう家へ帰れるんだけれども2、3人が

残っていたんだ。で、食い量はちゃんと渡してくれてたわけ。だけどその日のうちにあっという間にそれを食っちゃったんだな。ところがね、われわれの寮は6棟ある明善寮の一番端っこにあって、米俵が山のように積んである。「あれ、何とかなるんじゃないか」って言ってね、米の質を調べるときに使う竹の筒があるんですよ。刺したらザーッと米が出てくる。米はなんぼでもあるんだよね。「よし」って(笑)。僕は結婚したら生活能力ゼロみたいなもんになったけど、あの頃は元気が良くてね。「じゃあ、みんなに汁粉食わしてやる」とか言ってね。「どうするんだ？」って言うから、「食堂から盗み出すしかないよ」ってね。「どうやって盗み出すんだ？」って言うから、食堂行ってみると鍵がかかっている、あの鍵を何とか外さないといけないということになって。やっぱりそういうときには発想の転換っていうのが必要だね。鍵は根元がねじで木の扉に止めてあるんだ。あのねじをはずせばいいなって。だけど明るいところでやるとばれちゃうから夜中に電気を消して、自分の部屋でねじをはずす練習をしてさ。それで入ってみたら、砂糖が山のようにあるの。ちょっといただいてまた閉めて、ねじの頭に傷がついて後でばれるとまずいから醤油塗って錆ができるようにして。「子供の科学」の知識だな(笑)。それで戻ってきてみんなで食ってさ、いやあ、うまいうまいって。

そしたらね、それは8月だったんだけど、9月になってばれてね。どうしてかって言うと、まかないがお櫃の中にお砂糖入れといて、上に「さ」という字を書いといたの。それで9月になって見たら砂糖がすくわれてるって。だけど、どうして侵入されたのかわからないって。あれバレたら退校させられたかもしれない。バレずに済んだ(笑)。

高橋：面白いご経験ですね。講義は今の大学教養レベルですか？

西村：ああそうでしょうね。だけどね、そうやって飛んだり跳ねたりして何か高尚な本読んでたら

さ、いざ試験になってこれはもう間に合わないわけだよな。あれは1年のときかな。試験の直前になって誰かが「蔵王山に登りに行かないか」とか言ったんだよ。蔵王山に登って山形の方に下りるとサクランボが山のようにある。土曜日から行って日曜日に帰ってくるという計画だけど、試験は月曜日から。ところが見栄はって、「試験があるから行けない」なんていうやつは一人もいなかった。それで行ったのはいいけど、夕方の7時か8時に帰ってきて明日から試験でしょ、何もやってないわけ（笑）。ああなると人間ってのはね、やっぱり要領がよくなるんだね。出そうなどころだけちょっちょっとなら見てね。それで何とか乗り切って。

そのうち2年になったときに、寮に残るかどうかって話になってきた。1年のときにはこんなあほらしい明善寮なんていられるかって思ってたんだけど、どうもねえ、しごかれっぱなしで出ていくのも癪だな。それに下宿探すのも面倒くさい。飯もちゃんと食わしてくれるし。で、居残ったんですよ。で、今度はいじめる側ですよ。僕は面白かったんで「素っ裸になれ！」と言ったら、本当にパンツまで脱いだばかなやつもいるんだな。「パンツまで脱ぐやつがあるか！」ってまた怒鳴ったけどね（笑）。でも後々まさかそれを覚えてるやつなんかいないと思ってたらね、かなり偉い人で「私は明善寮の後輩ですけど、あなたが来てぎゃあぎゃあわめいてえらい目にあったのを覚えてますよ」って言うんですよ（笑）。

●戦時下の二高

西村：まあそんなことやっていたらね、その年かな、サイパン島が落ちたのは。それでえらいことになってきて学徒出陣ですよ。ところがね、日本は他の国に比べると学徒動員が最も遅いんだよな。日本の国ってのはいかにも軍国主義でひどいことをやってきたけど、非常に学生を大事にしたんだね。ともかく、僕の同級生も動員がかかって。だけどみんな達観してたね。

高橋：文系の方が主に動員されたんですよね？

西村：そう。それで僕は19だったと思うんだよな。だから徴兵検査にまだ1年早かったんだけど、五卒で来た文系の人は引かなかった。それで二つ道があって、一つは陸軍幹部候補生、もう一つは普通の兵隊。だいたい高学歴の人は幹部候補生になってくれと陸軍や海軍から言われるわけだよ。それはやっぱり、幹部が大事なんだよね。いささか優遇もしてくれるわけだ。

でも僕の友達の1人は、「おれは幹部候補生にはならない」と。普通の兵隊ならあと半年間猶予があったんだ。「どうせ死ぬならもう半年高校にいたい」って言ってね。彼はものすごく優秀な人だったけれども、終戦後ソ連に引っ張られて行って、シベリアに行って向こうで死んだんだよな。だから非常にかわいそうなことをしてね。

で、われわれは勤労働員となって陸軍の第二造兵廠っていうところに行って機関銃の弾を作った。13ミリの機関砲の。あるときアメリカの機関砲の弾が落ちてきたことがあったんだけど、それを見るとむこうのほうができが良かったね。どうやって作ってるんだかよくわからない。こっちは一つずつ旋盤で弾の中をくり抜いてるんですよ。だいたい1日に五千発くらい作ったかな。でもね、こんなものどうしてオートマチックにやらないで人間がやるのかなと僕は不思議に思ってたね。僕が作ってたやつは中に火薬が入ってるんですよ。だから当たるとバーンと弾ける。火薬の部屋なんてのが、まあ10ミクロン、もうちょっといい精度で作っておかないといけない。

そんなことやっていて、ある日寮に帰ってきたらね、1年生はまだ動員されてなくて勉強してるわけだけど、みんな浮かない顔してる。どうしたのって聞いたら「明日試験がある」と。物理の試験だって。どうにもこうにもならんって言うから、ちょっと本もって来いって言って、僕がじいっと見て四つ問題を出して、「これだけやってみろ」と言った。そうしたらね、驚くべきことに

三つ問題が出て、その四つの中から三つが出題されたんだ。

高橋：大当たりですね。

西村：大当たりでしたよ。あの頃が一番頭のいい時期だね。

高橋：やはり得意だったのは物理ですか？

西村：う～ん、何が得意だったんだろうなあ。僕は航空に凝っていたから、やはり物理だろうね。案外生物なんか面白かったね。一番苦手だったのはやっぱり英語だったね。ドイツ語は僕ね、決して苦手なわけではなかったんですよ。組の中でも割合できるほうだった。ところがね、勤労働員で半年間強制労働して何にもやらないでわけのわからない本ばかり読んでいたら、完全に忘れたね。だから人間というのは、何もしないでいると忘れるんじゃないで、体を動かすと忘れるんだね。だからね、体を動かさなきゃだめですよ、学者は(笑)。

高橋：勤労働員はどのくらいの間ですか？

西村：半年。2年生の後半、二学期三学期。

高橋：高校は1年短縮だったんですよね？

西村：3年のところが2年でしょ。最後の半年は勤労働員だから1年半しかやってないんだね。結局、学生が全部集まったのは卒業式。そのときに野口校長が挨拶したんだけど、野口校長ってのはね、勤労働員で学生が行っているところには視察に来たよね。だから偉い人ですよ。それで、「みんなこんなときに卒業するのはかわいそうだから、せめて赤飯くらい食わせてやってくれ」って言って第二師団に頼みに行って、もち米をもらってきてみんなに赤飯を食わせてくれた。それが、最後にみんなで会ったときだね。終戦の年ですからね。

高橋：その頃はやはり食料は厳しかったですか？

西村：それはもう、極めて厳しかったですよ。もう配給制度ですものね。ただ僕は造兵廠に行ってたでしょ。ああいうところは軍だから、一応食い物はあるんだ。ちゃんと晩飯食わしてくれたね。

それから11月3日の日に明治節だっていうんで、お祝いにお酒をくれたんだよ。それで僕ももらってきてさ、友達と2人で合わせて一升くらいあったんじゃないかな。洗面器もってきて温めて飲んだんだよ。そんな質のいい酒じゃないからさ、朝目が覚めてうとうとしていたら頭が痛くてさ。そしたらね、グーンって音がするんだ。見たらB29が青空高く飛んでるんだよ。そのときに初めてB29が来たんですよ。これはえらいことになったと思ったけどさ、まあしょうがないやって寝てたな。

それで、一番問題なのは進級できるかどうかっていうのだよね。あんまり成績悪いと留年する可能性があったんだよな。それで、二高は成績をパブリックに発表するんですよ。学校の掲示板に名前があって、点がついてる。その点がね、白・赤・黒・緑かな。赤がつくといけないんだ。40点以下か60点以下か。夜中に発表するんだけど、危ない奴は提灯もってそれを見に行くわけだ。席次が何番とか全部書いてある。でもああいうのはみんな問題にしない。別に一番だからって尊敬もしないし、ドンケツでもみんなある程度優秀だから。まあ、そんなこんなで卒業いたしました。

A Long Interview with Prof. Jun Nishimura [1]

Keitaro TAKAHASHI

Graduate School of Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: Prof. Jun Nishimura, after the graduation from Tohoku University, worked at Nishina Laboratory in Riken and started his study on cosmic rays under Shinichiro Tomonaga and Sachio Hayakawa. Especially, he contributed to the theory of 3-dimensional air shower of high-energy cosmic rays and his NK function has been used widely in this field. He also contributed to balloon experiments, X-ray satellites and VSOP project and served as the head of Institute of Space and Astronautical Science. In this article, we report a series of interview with Prof. Nishimura.